

2018年度

Mスカラ入試

国語総合

(古文選択可、漢文を除く)

[60 分]

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「しつけ」ということばが何を意味するかは、人によって異なります。基本的な生活習慣とそのスキルを作り上げることに限って用いる場合から、社会的に許容・賞讃される行動と否認・シツセキされる行動を実行のレベルで区別できるようにすることを中心にする場合、さらにはそれらを「善・悪」としての表象レベルで自主的に判断できることを重視する場合など、かなりの幅をもっています。それらのさまざまなレベルを含めて論じてみたいと思います。その理由は話を進める中で明らかになってゆくはずです。

ひとまず、「しつけ」を次のように呼んでおきます。その文化社会で生きてゆくために必要な習慣・スキルや、なすべきこと、なすべきでないことを、まだ十分自分で実行したり判断できない年齢の子どもに、はじめは外からシヨウバツを用いたり、一緒に手本を示してやったりしながら教えこんでゆくこと。そしてやがては自分で判断し、自分の「行動」を自分でコントロールすることによって、それを自分の社会的「行為」として実践できるように、周囲の身近なおとなたちがしむけてゆく営み。場合によっては、それは「保育」ということばと限りなく近づいて用いられることもあるかもしれません。それだけ「しつけ」の中には「保育」の基本問題が集約されているからでもあります。

「しつけ」ということばに、よく「躾」という漢字があてられ、自分の身を美しくするという意味で大変いい字だと好んで使う人も少なくないようです。しかし「しつけ」という語は元来、着物を「仕付ける」とこと結びついて、私たち日本人の生活の中に根をおろして来ました。躾という字がシサする「礼儀作法」も、しつけの重要な側面ではありますが、着物の「しつけ」が担っている意味の方が、しつけの過程の本質をよりよく表わしていると私は思います。着物を縫う時、あらかじめ形を整えるため仮に縫いつけておくのがしつけですが、大切なことは、いよいよ着物が本格的に縫い上がると、しつけの糸ははずす、ということなのです。しつけの糸はもはや不要であり、それが残っていることはおかしくなります。この「はずす」ことが、子どもの発達にとっても重要な意味をもつのです。

ちなみに、外国語、たとえば英語でこれにあたる語としては training とか、discipline など「訓練」「教えこみ」という意味の語や、behavior setting (行動を作り上げる) という語を用いるようです。これらのことばは、主としてしつけの過程のはじめの部分、つまり着物の例でいうと、
A 部分を表わしていますが、後半の重要な「はずす」方のニュアンスが感じられません。

日常の家庭生活の中での、着物を縫い上げることを指すことばが、そのまま子育てのことばとして取り上げられているところに、私たちの祖先の深い智慧とその文化を思わずにられません。私のような古い世代は、秋の夜、母が明日の父に着せるべく縫い上げた着物のしつけ糸を、軽い音を立てながらはずしていた光景を思い出したりしますが、今の親や子どもにそうした経験はほとんどなくなったことも確かです。生活

(とりもなおさず文化)の変化は見えないところでいろいろの影響をもってきます。着物を自分の手でしつけていた母親と、そうした経験のない今の母親とでは、子どもへのしつけ観も暗黙裡（カ）に変わってきているかもしれません。

いずれにしても、しつけは、「しつけの糸をはずす」ことを目的としてなされるものであることはまちがいありません。そこで、今、なぜ「しつけ」か。これからの子どもが生きてゆくにあたって、しつけがもつ意味は何か。子どもが「生きてゆくこと」の文脈の中にしつけを置いてとらえ直してみたいと思います。

「生きる」ということ、「生活する」ということの中心課題、それは、人間が「自己の実現」と「他者との関与」(コミットメント)という、二つの側面をどう統合して生きるかということにあると思います。人は個として、自分の思うところ、望むところ、信ずるところの達成を目ざして生きようとします。しかし、同時にそれは、ともに生きる人——その人もまた個としての自己を生きている——たちとのかかわりの中で、そしてそのかかわりを少しでもよいものたらしめる方向の中で実現してゆくことが求められます。

ここでいう他者とは、身近な個々の人である場合もあれば、自分の属するさまざまな集団であることもあり、広く社会や文化である場合もあります。発達のレベルや、その時その場の要請によっていろいろの形を取ってくるようになります。

いずれにしても、人間は、自分という個としてあるとともに、類としてあります。その二つのあり方がそのまま重なり合う場合は問題ありませんが、現実の生活では、対立葛藤し合うことが多く、その解決を迫られます。それは人間存在として私たちが「B」的に担っている二律背反性（エ）であり、リョウギ性であるといえます。意識的にせよ、暗黙裡にせよ、私たちの日々の生活はそのことへの対処で成り立っています。おとななら、自分の家庭での、また職場での行動や生き方を考えれば明らかでしょう。自分の要求やふるまいとそれが周囲や社会に対してもつ関係、共同性と責任との間の葛藤の中に私たちは生きています。

この自己実現と他者との関与の統合は、常に人間に課せられ、誰もが迫られている要請であり、解決がいちばん難しい課題にちがいありません。いや生涯をかけても正答不能な問題でしょう。少なくともよりよく生き、より誠実に自己と人に対しようとしている人である限り、このことの難しさは生活の中で感じとっているはずで、だからこそ、生きることは多くの悩みや悲しみと表裏しているのでしょう。私たち人間の共同体は、こうした解決困難な問題を互いにかかえあつた一人一人の集まりであり、その解決を求めての努力こそが共同体を創り上げる（オ）ギョウシユウ力（カ）になっているのちがいありません。

子どもが、この人間として生きることの中心課題にはじめて、そして具体的に直面し、その解決を迫られるのが、まさしく「しつけ」の場面であることを、私は以下にくり返し強調してゆくことになりました。しつけの中で、子どもはいよいよ「生きる場」へ投（カ）げこまれるのです。

しつけを、生きることの文脈の中に置き直して考えたいと先に述べました。確かにしつけは基本的な習慣・スキルや礼儀作法の教え込みを大きな側面として含みますが、その観点だけに限ってしつけを見ることには、しつけの本来の意味が覆（カ）いかくされるキグを抱くからです。特に

今日の子どもや教育の現状を見る時、そのキグをより強くします。

自己の実現と他者との関与を現実生活の中で統合することは、きわめて難しい二律背反であることを先に強調しました。その解決方法は、人間（子ども）が現実の生活の場での具体的経験として、実際に苦しい模索を重ねながら、「自分で」身につけてゆくしかないものです。外からの教え込みや強制は、時によってはその場の助けになることはあっても、それだけでは解決はありません。

子どもはしつけの中で、いちばん好きな両親や先生が自分に課してくる要請と、自分の要求との対立に苦しみながら、そしてその中で親や先生との共同生活をどう創り上げてゆくに悩みながら、人間の生き方の基本を学んでゆきます。それは「生きる意味」を求める態度を形成してゆく営みということができます。

今日の子どもや青年に多く見られる自分の側の意図や論理だけで人に接する態度、それが場合によっては他者の身体・生命に対するヒサンな事件にすら至ったことを考える時、その人間にとって出発点となるべき幼児期の基礎的経験が不十分なままに来てしまっているのではないか、という検討がなされるべきだと思います。それは、親が厳し^(ク)さやケンイを欠いていたとか、礼儀作法や善悪を教えなかつたとか、道徳教育の不足とかいう形の、Cな識者の批評では済まされない問題です。現にかつてとちがって、「あんないい子が」とか「平素は礼儀正しく愛想のよかつた子なのに」と言われる子が非行に走ったりすることも多く報告されています。知識としての善悪はどの子でも（いじめをする子でも）知っていますが、「生きる意味」（自己の実現と他者との関与の統合）を求める基本的態度の形成が希薄のまま、児童期や青年期に至る子が多くなっているのではないかと思います。

「しつけ」の復権を求める人も多いし、そのことは私も反対しません。ただその時に、「もつときびしく」とか「親や先生のケンイを」とか「昔のように礼儀作法を」とか式の主張だけでは、^(c)本質的解決につながることはならないのです。

もとより私は、今日の子どもにおけるさまざま問題行動のすべてが、幼児期のしつけのあり方に起因していると言うつもりはありません。ことに現在の文化や情報化社会の複雑さ、おとな（特に権力者）の倫理感の低下等々、子どもを生きづらくする状況は、複合した重圧として子どもにのしかかっています。

そうした中を生きてゆかねばならぬ子どもがまず幼い時期、生きることの基本的問題と意味、自己の実現と他者との関与の統合ということをしつけの中でどれだけ体験できているかが人生への出発点としての幼児期のもつ意味を左右する、と言いたいのです。

「行動」と「行為」の問題から始めましょう。

幼児期に先立つ乳児期（二歳前後まで）では、子どもの欲求や要求に基づく反応や行動は、おおむね親をはじめとする養育者や保育者によって基本的に受容されます。もちろん出生とともに（あるいは出生以前からも）、乳児は文化的・社会的文脈の中に置かれます。養育者の世話も、単に子ども自身の生命維持のための適応に必要な行動だけでなく、文化的・社会的な生活文脈に合わせての身辺的習慣を獲得するようにと方向づ

けるものです。しかしそれらは教えこみとか強制という形をとるよりは、養育者自身の生活形式へと暗黙裡に子どもに方向づけをほどこしてゆくのが普通です。睡眠時間や授乳時間を一定にしていくのはちょうどその例です。

それに対して、幼児期に入りしつけが本格化してくると、事態は一変します。子どもは自分側の要求や動機、感情だけによって反応したり行動するだけでは許されなくなり、周囲からの干渉が始まります。それまでの、自分を無条件に満喫していた世界におとなの世界が侵入してきます。もう少し正確に言うなら、おとなとの共同生活を築くべき場としての世界に子どもは投げ入れられます。そこは、自分の行動が社会のもつ文化的規範に照らして批判され、評価される場です。自分の行動を惹きおこした「D」とその表現形態、そのもたらす「E」の連鎖が、単に自分に対してもつ「意味」だけでなく、それが他者に対してもつ社会的・対人的意味が問われてくることとなります。つまり、動作や行動がそれ自体で問題にされるのではなく、何のためにそれをし、それが自分にとってだけではなく、他者にどう影響をもたらすかという観点に立つ（たとえば「棒をふりまわす」という動作が、部屋の中ではどう意味をもってくるのかを理解する）ことを要求されるのです。

このことは、動作や行動がそれ自体としてではなく、一つの「行為」としてそれがもつ社会的意味が問われてくることに他なりません。それらが「善き行為」、「悪しき行為」として意味づけられ評価されることとなります。もともとしつけは、子どもに対してその行為の善悪を教えるのが原則であって、「お前はよい子、悪い子」を教えるのが目的ではありません。「お前は常に才母サン^(注)にとって大切な大好きな子ども」なのです。その才母サンから受けてこそ、子どもは罰も受け入れてゆきます。

^(d)「行動から行為へ」の最初の変換、それが「しつけ」の本質と言えます。そして、この「行為」として意味づける働き（行為の形成）こそが、これまで強調してきた自己の実現と他者との関与の統合という、生きることのコンカン^(ケ)を担うものとなるのです。

しかし「行為の形成」は、当然「行為主体」としての自己自身の形成と表裏して行われます。それはその「行為」を生む「行為主体」として子ども自身を「F」ことにつなげてきます。これは子どもにとって、はじめてのきわめてトウワク^(コ)する経験です。そして「行為主体」としての評価は、当然主体としての「責任」を問われるということでもあります。好きな才母サンから愛され続けるためには、その人から「否定される行為」を捨て、「肯定される行為」へ向かう自己努力が要請されるからです。ここでは、行為の自己選択と決定が必要となります。自己選択と決定のあるところ、「責任」が求められます。

青少年のかかわる問題行動や、非行の増加や年齢の低下が嘆かれています。発達の研究から見たそれらの要因の一つとして、「G」で営まれていることがあげられます。今日の教育の再出発も、幼児期において、自他の行動を行為としてどう意味づけるか、という観点から、つまりしつけのあり方から見直すことが必要と思うのはそのためです。

（岡本夏木『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』による）

（注1） 才母サン——本文では、母親のような、子供が愛着を持つ人全般を表す。

問一 傍線部(ア)～(コ)の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 1 。

10

(ア) シツセキ

1

- ① ギョウセキが回復する
- ② 費用をセキサンする
- ③ ヒツセキを鑑定する
- ④ 会合にシユツセキする
- ⑤ ショクセキを果たそうとする

(イ) ショウバツ

2

- ① 被害者に対するホシヨウ金
- ② 自らを名人とシヨウする
- ③ 作品をゲキシヨウされる
- ④ 試合でのシヨウキを見出す
- ⑤ 運動をシヨウレイする

(ウ) シサ

3

- ① モクシで確認する
- ② 似たものドウシだ
- ③ シレイトウの役割を果たす
- ④ 権力をコジする
- ⑤ シフクを肥やす

(エ) リヨウギ

4

- ① モギ試験を受ける
- ② ギギをただす
- ③ ギロンが白熱する
- ④ 友人にナンギをかける
- ⑤ 通貨をギゾウする

(オ) ギョウシユウ

5

- ① 天をアオぐ
- ② アカツキの空
- ③ あいつのシワザだ
- ④ 良いオコナイをする
- ⑤ 工夫をコらす

(カ) キグ

6

- ① キウンが高まる
- ② キケンな橋を渡る
- ③ キバツな服装
- ④ ハンキを翻す
- ⑤ キリヨウのある人

(キ) ヒサン

7

- ① ザンパイを喫する
- ② お金をサンダンする
- ③ サンザンな思いをする
- ④ ザイサンを蓄える
- ⑤ 神社にサンパイする

(ク) ケンイ

8

- ① イワカンを感じる
- ② コウイを継承する
- ③ イフウ堂々
- ④ 研究を専門家にイシヨクする
- ⑤ イサイを放つ

(ケ) コンカン

9

- ① 公務員としてカンチヨウに勤める
- ② 自動車はキカン産業の一つだ
- ③ 初志カンテツ
- ④ カンセイな住宅街
- ⑤ カンヨウな位置を占める

(コ) トウワク

10

- ① 試合でのケントウをたたえる
- ② 支持するセイトウはない
- ③ おやつをキントウに分ける
- ④ オントウな見解を述べる
- ⑤ 富士山をトウハする

問二 傍線部 (a) 「しつけの過程の本質」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11。

- ① 大人たちがしっかりと礼儀を教え込むことで、子供が自ら判断して行動することができるようになること。
- ② 大人たちが働きかけることで、子供が自分の行動を自ら自然にコントロールできるようにすること。
- ③ 大人たちが積極的に範を示すことで、子供が真に正しい行動を身につけられるようになること。
- ④ 大人たちが祖先の深い智恵を用いることで、子供がその文化社会で生きていく力をつけるようになること。
- ⑤ 大人たちが何もしないことで、子供が必要な習慣やスキルを自然に身につけられるようになること。

問三 空欄 A に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① しつけ糸を準備する
- ② しつけ糸を針に通す
- ③ しつけ糸の縫い方を決める
- ④ しつけ糸で縫いつける
- ⑤ しつけ糸を処分する

問四 空欄 B に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

- ① 不可逆
- ② 不可避
- ③ 不可知
- ④ 不可分
- ⑤ 不可測

問五 傍線部 (b) 「生きる場」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 自分の個としてのあり方と、周囲や社会の中でのあり方とが、時に対立し、葛藤する場。
- ② 自分が思い、望み、信じるところについて、他者から批判され、その信念の強さを試される場。
- ③ 自己実現をしていくにあたって、反対する周囲や社会を乗り越えていく必要が生じる場。
- ④ 自己実現と他者との関与の統合の難しさを目の当たりにし、誠実であることを放棄せざるを得ない場。
- ⑤ 自分の望みを放棄し、共同体や社会全体のために尽くそうと、協調性が高まっている場。

問六 空欄 C に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① 消極的
- ② 方法的
- ③ 否定的
- ④ 独断的
- ⑤ 形式的

問七 傍線部（c）「本質的解決につながることはならない」のはなぜか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 厳しい考えの人から教えられることでは、現実生活の中で起こる問題を直接解決することにはつながりにくいから。
- ② しつめの復権を求める人に限って、人間にとって大切な幼児期の基礎的な経験をないがしろにするから。
- ③ 厳しくしたり昔のように礼儀作法を教えるだけでは、現代の文化や情報化社会の複雑さに対応できないから。
- ④ 周囲や他者からしつめを押しつけられるだけでは、人間が生きていく上で持つべき基本的な態度が養われないから。
- ⑤ 昔ながらのしつめがなされなくなったことではなく、子供達の人間関係の希薄さが根本的な原因だから。

問八 空欄 D・E に入る最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は Dは 17・Eは 18。

- ① 原因
- ② 善悪
- ③ 意図
- ④ 関係
- ⑤ 結果
- ⑥ 経験

問九 傍線部（d）「行動から行為へ」の最初の変換」の内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① 自分自身のためという意識のみならず、他者に影響を及ぼそうとする意識をもってふるまう。
- ② 養育者の生活形式に暗黙裡に従うのみならず、何のためにするのかという意識をもってふるまう。
- ③ 自分自身の要求や動機、感情のみならず、オ母サンの欲求や動機、感情を加味してふるまう。
- ④ 自分がしたいことという観点ではなく、自分や他者にとっての意味や影響という観点でふるまう。
- ⑤ 自分が望むことという意識ではなく、自分が望むことは他者も望むことだという意識をもってふるまう。

問十 空欄 F に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- ① 否定する ② 形成する ③ 評価する ④ 肯定する ⑤ 自覚する

問十一 空欄 G に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 21。

- ① 彼らの対人接触が、自分の行動レベルにおいてしか処理されず、自他の「行為」としての意味づけと自覚を基本的に欠いたところ
② 彼らの動作や行動が、自分の意図や論理だけを念頭に行われ、周囲の思いや社会の要請の内容を尊重しないところ
③ 彼らの他者との接し方が、自己の実現と他者との関与の統合という認識のもとではなく、知識としての善悪という表面的なレベル
④ 彼らの意識の中に、オ母サンから愛され続けるという観点しかなく、「行為」という観点からの意味づけを欠いたところ
⑤ 彼らの心の内が、自己の実現と他者との関与という二律背反に引き裂かれ、自己の実現のみを重視する方向に傾注していったところ

問十二 本文に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 22。

- ① まず、しつけ糸がしつけと密接に関連していると指摘した上で、しつけが持つ意味について持論を述べている。その上で、しつけをめぐる大人と子供の認識の違いについて指摘しながら、子供へのしつけのあり方について述べている。
② まず、しつけ糸を例に出しながらしつけの本質について指摘した上で、私たちが生きることの意味について述べている。その上で、子供が生きる場に投げ込まれていくことやその意味を説明しながら、しつけが果たす役割について述べている。
③ まず、しつけ糸の役割と現代において子供が生きることとの共通する点について指摘している。その上で、現代の子供がどのような生きる場に投げ込まれていくかを説明しながら、現代社会におけるしつけの問題点と解決策を述べている。
④ まず、しつけ糸を例にしつけの意味について述べた上で、私たちが生きる上での中心課題について述べている。その上で、子供をめぐる現代社会の状況について説明しながら、これからあるべきしつけの方法について述べている。
⑤ まず、しつけに関する日本と外国の違いについて指摘することを通じて、あるべきしつけの方向性について概観している。その上で、子供達が発達の中で経験する苦難について説明しながら、その際にしつけが果たす役割について述べている。

〔選択問題〕 〈現代文〉か 〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕 〈現代文〉 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

短歌のふりがなにもいろいろなタイプがある。

「金欄きんらん緞子どんすの帯しめながら」というのがありました。「金欄緞子」は「きんらんどんす」としかよめない。なのになぜふりがなをつけるのかといえ、この字をよめない人もあるんじゃないかと親切心でつけたのだろう。「ガッコの先生」型である。一般にふりがなのついた箇所かしよは歌の線路が複雑になっているわけだが、この型のはどっちをとっても同じことだから、見かけは複雑実質単線である。一番単純なふりがなだ。

「新北風みいにしの空ゆく差羽(注)」というのがあった。これは、ふりがなのほうが歌の本線である。「みいにしの空ゆく差羽」なんだから――。 a

「みいにし」ではだれもわからない。いやわかる人はわかるだろうが、並の者にはとてもわからない。 b、「みいにし」というのは新北

風のことだよ、と注釈をつけてくれている。 c これは「ふりがな本線、漢字は注釈」型である。 d 小生こせいなんぞは「新北風」と注釈

をつけてくれてもまだよくはわからない。 e 「その冬はじめて吹く北風のことなのかなあ」と見当をつけてみるぐらいのことはできる

(あつてるかどうかわからないけど)。

「磁器まげり人形は瞬まばらきをせず」なんてのもこの「漢字は注釈」型なのだろう。まあ小生みたいな門外漢は、舌をかみそうな外国語のふりがなより、「磁器人形は瞬きをせず」とそのまま日本語でよましてくれたほうが世話がなくてたすかりますけどね。

「老武者の影わら嘲わらひて駈かくる」というのがあった。これも歌の本線はふりがなのほうなのだが、「わらひて駈くる」だと老武者が楽しげにニコニコ笑つてるように受取られては不本意だから、「笑いにもいろいろござんすがここは嘲笑なんですからね」と言っているのである。「漢字で意味特定」型である。

同じようなのに、「朝の受話器こに息の声ひびけり」というのがあった。察するにこれは、「子の声ひびけり」では男の子だか女の子だか判然しない。「これは息子の声なんだからそのつもりで読んでくれよ」という、これも意味特定の指示なのであろう。もっとも「息女」ということもあるから「息」すなわち「男」とも言えないのだけれど、まあ「愚息」と言えば男の子なんだから、この「息」は男に特定する意図なのであろうと思う。

この種のふりがなは多いのですかね。新聞の短歌欄をのぞいてみたら「珈琲まめを煎る」というのがあった。ただ「豆を煎る」では大豆か何ぞだ

ろうと思われかねないから、「ここはコーヒー豆なんだぞ」と言っている。また「妻葬送り」というのがあった。「妻おくり」だと細君が海外旅行にでも出かけるのを送ったみたいだから、「葬式だぞ」と言っている。

こういうのは、耳で聞いた者には、大豆、旅行としかきこえず、字を見てはじめて事実がわかって話の様子がまるでちがってくるんだから、かなりハンパなもののようにしろうと目には思える。それにこの手を使えば、「夜空」でも「日本海」でも「A」でも「B」でも何でもやれちゃうんだから、なんだかインチキくさくもある。

さてまた「残る生を快適にすぞす」というのがあった。これはまたちよつとちがう。ふりがなの「よ」は三十一文字の条件を通過するためのかりのもので、歌の心は「残る生を」のほうで味わってくださいよというつもりなのである。ふりがなは歌の外形を、本線は歌の内実を担当するという「任務分担」型である。歌が三十一文字一筋で物の姿や人の心をうつすものだとなれば、こういうのはちよつと邪道なんじゃないかなあ、と外部の者には感じられる。けれども、こういう複線利用がいまの短歌の一つの技巧になっていて、短歌世界に居住するみなさまがたがそのわざをきそつていらっしやるのであれば、上にもべたように、はたの者がとやかく言うことはないわけである。

短歌のふりがなを見て考えたことを一つ。

江戸時代の終わりまで、日本人が読む文章は基本的に二種あった。一つは和文である。和語をもつてつづられ、すべて耳で聞いて解し得る。歌は文章ではないが、性格としてはこちらに属する。伝統的な和歌は和語のみで作られ、漢語はもちいない。例外として「きく(菊)」「もじ(文字)」など二三の語があるが、こういうのは平安時代の人もすでに和語のように思っていた。

もう一つは漢文である。特に江戸時代には、漢土の新刊書が長崎経由で数多く輸入され、またそれらが日本で翻刻された。知識人がこのんで読んだのは主としてこちらである。

かつての日本人が中国書を読む際には、音声はともなわない。またともないようがない。文字を見て直接意味を了解する。漢文という下から上へひっくりかえったりして日本語で読むものかと思っている人があるが、それは初学の子供が特定の教科書を勉強する時にやることである。一通りの知識人は、明治以後の知識人が欧米の書物を読むのと同じように読む(当然のことだが)。ただ欧米の書物を読む際は頭のなかで音声は喚起されているだろうが、それがなく、視覚が直接理解につながるのである。そういう読みかたでほとんど本を読めるようになるのが理想とされた。

明治以後、そういう習慣を身につけた人たちがひろく書籍雑誌等に文章を書くようになる。そういう文章には、文字から意味がわかればよいので、どうよむかは問題でない、書き手も意識していない、ということがよくある。ごく簡単な例をあげるなら、「某女を刺殺す」とあれば、これを見て意味がわかれば十分なのである。これは「しきつす」なのかそれとも「さしころす」なのかと気に病む必要はない。この、文字が音声の介在なく意味をつたえる、というのが漢文系^(口)日本文の特徴の一つである。

江戸時代までの知識人の本の読みかたというのはそういう読みかたであった。視覚を音声に変換するという回路を経由しないのだから、これに習熟すれば、和文を読むよりもずっと速く、また的確に書物を読むことができた。

上に言ったように、和歌は本来和文系統のもの、つまり聴覚型である。ところが日本の知識人は、視覚による文字の形象が直接知性なり感性なりを刺激する、という方向で精神活動をきたえてきた。つまり、視覚で意味を感じる傾向がある、ということだ。

小生は近代短歌の歴史についてはいっこうに不案内だが、明治以後、この後者の用語（つまり文字）や感覚が、どんどん和歌に侵入してきたのではないだろうか。

たとえば「躊躇」という文字（そのよみではなくこの文字のすがたかたち）によってこそ、足が前に進みにくい様子や心持を実感できる。あるいは「齟齬」という文字によってこそ、ものごとや気分がちぐはぐな感じを実感できる。そういう人なら、歌を作る際にも、この文字によって自分の気持ちを表現したいと思うかもしれない。しかし歌としてはそれらしい和語にしておかないとかつこうがつかない。そこで、「躊躇^{ためらい}つ」とか「躊躇^{ためらい}て」とか複線構造にすることになる。

そういうことからはじまったのが時とともにだんだん野放図になって、ついには「珈琲^{まめ}」なんていう、^(ハ)まともな世間の人が見たらびつくりするようなのがあらわれるにいたったのではあるまいか。

（高島俊男『お言葉ですが…』別巻1による）

（注）差羽——さしば、タカ科の鳥。

問一 空欄 a) e に入る最も適切な組み合わせを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 23。

- ① a つまり b でも c そこで d もっとも e しかし
- ② a もっとも b しかし c つまり d でも e そこで
- ③ a でも b そこで c しかし d つまり e もっとも
- ④ a しかし b そこで c つまり d もっとも e でも
- ⑤ a しかし b もっとも c でも d そこで e つまり

問二 空欄 A ・ B に入る最も適切なものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は 24。
25。

- ① 薔薇ばら
- ② 後朝きんぎぬ
- ③ 山道みち
- ④ 富士山ふじ
- ⑤ 橄欖オリブ
- ⑥ 乱髪みだれがみ

問三 傍線部(イ)「いろいろなタイプがある」の説明として適切ではないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① 「ガッコの先生」型は単純に漢字の読み方を示すだけで、漢字の注釈や意味の特定はしない。
- ② 「ガッコの先生」型・「ふりがな本線、漢字は注釈」型・「漢字で意味特定」型・「任務分担」型の四種類がある。
- ③ 「見かけは複線実質単線」型・「ふりがなが歌の本線」型・「ふりがなが歌の外形」型の三種類がある。
- ④ 「ふりがなが歌の本線」型は「漢字は注釈」型と「漢字で意味特定」型の二種類を含む。
- ⑤ 「聴覚型」と「視覚型」の二種類がある。

問四 傍線部（ロ）「漢文系日本文」に関する筆者の考えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 日本の漢文に慣れた知識人は、読み方が分からなくても漢字を見れば意味が分かる。
- ② 音声が入らないから、漢字にどの和語を当てることが重要である。
- ③ 漢文に慣れた書籍雑誌の書き手はあまり読み手のことを意識していなかった。
- ④ 視覚を音声に変換せずに文章を読むと、細かな感覚が正確に把握できない。
- ⑤ 字形から意味だけを捉え、読み方を詳しく追究しなかったのは厳密さに欠ける。

問五 傍線部（ハ）「まともな世間の人」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 聴覚型である和歌に視覚的刺激を取り入れた短歌に斬新さを感じる門外漢。
- ② 世間一般の常識を踏まえて行動し、知性と感性を備え持つ人々。
- ③ 短歌の世界に居住せず、独特の表現方法に距離を感じる素人。
- ④ わざと送り仮名を難しく使い、奇をてらう短歌作者を批判する外部の者。
- ⑤ 和語でつづられた和歌を聴覚で理解し、和文の伝統を守ろうとする人々。

問六 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① ふりがなと漢語の混用によって伝統的な和歌に革新をもたらしたのは時代の必然である。
- ② 短歌を嗜む人々は江戸時代の終わりまでの知識人の読む習慣を受け継いでいる。
- ③ 漢字を多用することによって近代短歌の表現に奥行きが生まれたことを肯定している。
- ④ ふりがなの複線利用が短歌の世界のはやりであっても、和歌の伝統を破壊する恐れがある。
- ⑤ 和歌は本来聴覚型であるが、近代短歌は視覚でも意味を伝える工夫がなされる。

〔二〕 古文 保元の乱（一一五六年）に敗れた源為朝は、伊豆の沖合の島に流刑となった。次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

さて鳥を巡りて見給ふに、田もなし、畠もなし。菓子もなく、絹綿もなし。「汝ら、何をもつて食事とする」と問へば、「魚鳥」と答ふ。「網引く体見えず、釣する舟もなし。また扱も立てず、餅縄も引かず。いかにして魚鳥をば取るぞ」と問へば、「我らが果報にや、魚は自然と打ち寄せらるるを拾ひ取る。鳥をば穴を掘りて、領知分かちてその穴に入り身を隠し、声を学びて呼べば、その声について鳥多く飛び入るを、穴の口をふさぎて、闇取りにするなり」と言ふ。げにも見れば鳥穴多し。その鳥の勢は軋ほどなり。為朝これを見給ひて、件の大鎗にて、木にあるを射落とし、空を翔るを射殺しなどし給へば、島の者ども、舌を振るうて怖ぢ恐る。「汝らも我に従はずは、かくのごとく射殺すべし」と宣へば、皆平伏して従ひけり。身に着るものは、網のごとくなる太布なり。この布を面々の家々より多く持ち出でて前に積み置きけり。鳥の名を問ひ給へば、「鬼が島」と申す。「しかれば、汝らは鬼の子孫か」「さん候ふ」「さては聞こゆる宝あらば、取り出だせよ。見む」と宣へば、「昔、正しく鬼神なりし時は、隠蓑、隠笠、浮かび履、沈み履、剣などいふ宝ありけり。その頃は船なけれども、他国へも渡りて、日々人を食ひ生贄をも取りけり。今は果報尽きて、宝も失せ、かたちも人になりて、他国に行くことも叶はず」と言ふ。「さらば島の名を改めむ」とて、太き葦多く生ひたれば、葦島とぞ名付けける。この島具して七島知行す。これを八丈島の脇島と定めて、年貢を運送すべきよしを申すに、「船なくしていかかすべき」と嘆く間、毎年一度、船を遣はすべきよし約束してけり。但し、今渡りたるしるしにとて、件の大童一人具して帰り給ふ。

〔『保元物語』による〕

〔注1〕 扱——鳥をとらえるために竹束や木の枝にもちを塗り、おとりのそばに立てるもの。〔注2〕 餅縄——鳥をとらえるためにもちを塗り付けた縄。

〔注3〕 領知分かちて——持ち場持ち場を定めて。〔注4〕 勢は軋ほどなり——体の大きさはひよどり（スズメ目ヒヨドリ科の鳥）ぐらいである。

〔注5〕 八丈島の脇島と定めて——八丈島の一部と見なして。〔注6〕 件の大童一人——本文の前に、「たけ一丈あまりある大童の、髪は空さまに取り上げたるが、身には毛ひとしと生ひて、色黒く牛のごとくなるが、刀を右にさして多く出でたり。恐ろしなども言ふばかりなし」と見える。

問一 傍線部(イ)・(ホ)の主語として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は ・ 。

(イ) 見給ふ ① 源為朝

② 魚鳥

③ 島の者ども

(ホ) 嘆く ④ 件の大童一人

⑤ 語り手

問二 次の波線部の語の中から名詞を一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

① 絹綿もなし

② 魚は自然と打ち寄せらるる

③ 声を学びて呼べば

④ 闇取りにするなり

⑤ かくのごとく射殺すべし

問三 傍線部(ロ)「舌を振るうて怖ぢ恐る」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

① 木の上や空の鳥をも射落とす大きな鎗矢の威力は噂通りであると賛嘆している

② あらゆる鳥を射殺す為朝の非道さを島の者どもは非難している

③ 島の者たちは為朝の弓の腕前に驚き震えている

④ 島の者らは舌を長く出して為朝を威嚇している

⑤ 島の者らは為朝の弓術は驚くばかりだと大声を出し騒いでいる

問四 傍線部（ハ）「この布を面々の家々より多く持ち出でて前に積み置きけり」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 島の者は太布であつらえた着物をこれまでは着ていたが、今後は別の素材の着物に替えることで自分たちの純朴さを示そうとした。
- ② 網のような太布で作られた着物を山のように積み上げてみせることで、自分たちがいかに怪力を有しているかを見せようとした。
- ③ あちらこちらの島から強奪してきた太布の着物をすべて差し出して、島の者たちはこれまでの生活をすべて捨てようとした。
- ④ かつては有していた数々の宝があつたものの今はこのような太布しかないと偽り、為朝に同情してもらおうとしていた。
- ⑤ 自分たちが着る太布を家々から多く持ち寄り積み上げて見せることで、為朝に対して絶対に服従するという意をあらわそうとした。

問五 傍線部（ニ）「さらば島の名を改めむ」と言う源為朝の気持ちの説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 人を殺したり宝を盗んだりすることもない善良な人々が暮らしているのに鬼が島と言われ、島の者たちがあまりに気の毒である。
- ② 鬼が島という名称を聞いただけで八丈島の人々は恐れるだろうから、もともと人々が近づきやすい島名に変えておきたい。
- ③ 噂うわさに聞く数々の鬼の宝さえも持ち合わせないこの鬼が島に暮らす者どもは、もはや全く恐れるに足らない存在である。
- ④ もはや鬼と言われるような行為もしておらず姿形も鬼とは言えない者たちが住む島なのであり、鬼が島という名は相応ふさわしくない。
- ⑤ 島に暮らしている者たちに因よんだ名称よりは、葦が生えているという島の様子を島名とした方が、人々の記憶に留まるであろう。

問六 『保元物語』と同じ文学ジャンル（種類）の作品を、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 『山家集』
- ② 『太平記』
- ③ 『住吉物語』
- ④ 『方丈記』
- ⑤ 『宇治拾遺物語』